復興と新生　未来へつながるキャンパス構想

■ 青葉山北キャンパス

理学研究科合同C棟（理学系総合研究棟）が完成

昨年から建設が進められていた理学研究科合同Ｃ棟（理学系総合研究棟）が9月に完成。1階には大ホールの他、カフェ・コンビニエンスストアも設置され、仙台市営地下鉄東西線青葉山駅からのエントランスとしてにぎわいのある空間を目指している。

今後、青葉山駅からの歩行者アプローチ空間の整備も予定している。

理学研究科合同C棟

■ 青葉山新キャンパス

災害科学研究棟・レアメタル総合棟が完成

新キャンパスの中央道路であるキャンパスモールに面して、災害科学国際研究所の拠点施設としての災害科学研究棟と、レアメタルなどの研究を行うレアメタル総合棟が完成。いずれも免震構造の建物で、デザインコードに則りスクラッチタイルによる縦基調のファサードを持ち、悪天候時の歩行者動線としての回廊（ピロティ）を足元に設けている。

また農学系総合研究棟、環境科学系総合研究棟、アカデミック・サイエンスコモン、レジリエント社会構築イノベーションセンター（いずれも仮称）の建設に着手した。

災害科学研究棟

レアメタル総合棟

■ 青葉山東キャンパス

工学研究科被災3系本館改築が完成

東日本大震災から3年が過ぎ、地震被害を受けた電子・応物系、マテリアル・開発系、人間・環境系の本館3棟の改築工事が竣工した。

免震構造と非常用発電機による安全対策に加え、自然光の入る廊下やスマートメーターなどBCP対応や低炭素建築物への配慮をしている。1960年代につくられた青葉山東キャンパスのモダニズムを継承し、それぞれ個性を持ったファサードでありながらも、連続性や素材の特徴、質感を活かした質実剛健な外観により全体としてキャンパス景観の緩やかな調和を図っている。

電子情報システム・応物系1号館

マテリアル・開発系教育研究棟

人間・環境系教育研究棟

■ 川内キャンパス

図書館を知的交流の拠点としてリニューアル

建設から40年となる図書館本館の全面改修が完了。学生の主体的な学びを支えるラーニングコモンズ機能の拡充や、収蔵能力の拡大などが行われた。また開放的なエントランスに隣接して設けられたギャラリーは、学内外に大学の知を発信する場となる。

図書館周辺の屋外空間も整備され、エントランス正面は、内部と連続的な床仕上げの交流広場へ、急な斜面だったアプローチは、ゆったりと歩ける階段広場へとそれぞれ生まれ変わった。また千貫沢沿いには遊歩道が設けられ、自然を感じながら休憩や散策が楽しめる。

図書館本館は川内キャンパス南北の結節点に位置していることから、今回の環境整備により、キャンパス内外の歩行者動線がスムーズに改善された。

■ 星陵キャンパス

歴史と緑を活かし医学部正門周辺と四ツ谷用水跡を整備

最先端の医学研究拠点として整備が進められていた「東北メディカル・メガバンク棟／医学部6号館」が完成。これにあわせ、医学部正門から建物までのアプローチ空間を広場として再生する整備を行った。その際に、旧医学部本館（大正7年～昭和49年）が置かれていた当時から残る2本の大銀杏を、歴史を継承するシンボルとして保存・活用を図った。

また北七番丁通りに面するキャンパス北東部には、医療者の為の研修・宿泊施設として「星陵レジデンス」が完成。この建物西側に隣接して、かつて仙台の城下町を潤した四ツ谷用水の貴重な遺構が荒れた状態で残されていたものを、建物の整備にあわせ、ポケットパークとして再整備した。

その他には、既存の厚生会館にオーディトリアムと情報ラウンジを増築し、星陵キャンパスの交流拠点としてリニューアルする整備が進行中である。

星陵レジデンスと四ツ谷用水跡

東北メディカル・メガバンク棟・医学部6号館と大銀杏

■ 片平キャンパス

産学連携先端材料研究開発センターが完成

五橋通りに面する片平キャンパス北東角に産学連携先端材料研究開発センターが完成。歴史的建造物に合わせたスクラッチタイルによる縦基調のデザインを採用するとともに、通りに面する建物のコーナー部をガラス張りのラウンジにすることで、開かれたキャンパスとしての表情を作り出している。

知の館の建設に着手

国内外の研究者が集い、共に研究・交流する場として「知の館（仮称）」の建設に着手。歴史的建造物である本部棟の一部改築であるため、外観は復元を基本とし、内部はセミナー室や研究室、交流ラウンジなど新たな機能を持つ施設として生まれ変わる計画。